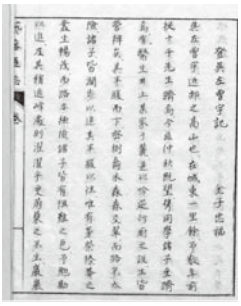
ふるさとふちゅう 再発見

【第61回】府中が農村だったころ（21）～府中町内の山（4）

呉娑々宇山は広島から近く、山頂からの眺めも良いため、江戸時代にも登山を楽しむ人がいました。『芸藩通志』巻151に「登呉左曽宇記」いう登山記があります。呉娑々宇は呉左曽宇と表記しています。縦20字29行で全579字の漢文で書かれており、ここでは山の様子が分かる部分のみ要約を紹介します。関心のある方は活字で掲載されている復刻版『芸藩通志』を探してみてください。

呉左曽宇山は広島城の東一里（約4㎞）あまりにあり、自分も数年前に師匠の加藤十千先生と一緒に登ったが、今年8月16日に友人と共に登った。麓の知人宅で弁当を準備した。麓から中腹までは大木が密生し葉が青々と茂っている。道は狭く険しい。中腹では茅や芝が生え草が群がり茂っている。道は極めて険しい。稜線近くは日が差して明るい。頂上付近は豹、虎、竜や巨人に似た岩が重なり合っている。一番大きい岩は縦横2丈（約6ｍ）あり数十人が座れそうで博打岩という。頂上の空は澄み、清々しく四方が見渡される。東南は蒼海と遠くの山が波のように望め、西北は連峰が横たわる。帯のように輝く長い川（太田川か？）と町（広島城下）がある。弁当を食べ、詩を作って楽しんだ。

筆者は金子忠福で号が楽山です。忠福は何と読むかは不明です。大正14（1925）年に刊行された『芸備先哲伝』によると、代々東城浅野家に仕える医師の家で、楽山が儒学を志し、広島藩の儒者加藤十千の弟子になりました。安永3（1774）年には藩の学問所で教えるようになりました。享保4（1719）年に生まれ、文化2（1805）年5月5日に86歳で死亡しています。この登山記は寛延3（1750）年8月の作とあり、忠福が31歳の時のものです。


『芸藩通志』巻151
（国立公文書館
デジタルアーカイブ）

府中町文化財保護審議会委員　菅　信博

魅力発信！
まち記者レポート
土生 けい さん

好きを形に。府中町のおさかな博士の挑戦

「これはね、メカジキ！」

図鑑を開き、目を輝かせて教えてくれたのは、府中町に住む山城 飛陽真ちゃん（5歳）です。

「ここがかっこいいんだよ」と身振り手振りで教えてくれて、魚の名前だけでなく、特徴や習性まで詳しく話す姿に、大人も思わず聞き入ってしまいます。3歳の頃から、祖父と一緒に釣りをしたり、水族館へ出かけたりしながら、魚に親しんできました。

そんな飛陽真ちゃんの「資格を取りたい」というひとことから挑戦したのが、日本さかな検定です。「息子の『好き』という気持ちを形に残してあげたい」というご両親の願いもあり、親子二人三脚の日々が始まりました。

受験を決めてから試験日までは約1か月。毎日1時間ほど、図鑑や過去問題に向き合い、30種類もの漢字を覚え、大人でも難しい全国の郷土料理も一生懸命覚えたそうです。

努力が実を結び、飛陽真ちゃんは見事、最年少で3級に合格しました。「覚えるのは大変だったけど、魚が好きすぎるから楽しかった！」と笑う飛陽真ちゃん。「将来はさかなクンになりたい！」と夢も教えてくれました。

ご両親は「頑張った時間は、きっと子どもの中に残ると思います。これからも、好きなことを大切に、応援していきたいです」と温かな思いを話してくれました。

夢に向かってまっすぐ進む飛陽真ちゃんの毎日は、これからも魚たちとともに続いていきます。